

日光川とは

(時之島排水路も含めて)

熊澤 良嗣 調

一宮市史の大江川の項に「...是において^{まさひら}匡衡、農民の窮乏はその源灌漑排水にありとし兼ては一の宮真清田神社、国府宮尾張大国霊神社の御手洗となさんが為に、木曽川二之枝三之枝から天然放流せる一河川を改修且開削して用悪水に用いしめた。その大工事がこの川である・・・」という記述がある。

大江匡衡が大江用水を造ったのは1001年とされるから、木曽川の堤防などまだなかった時代である。従って上にあるように二之枝・三之枝からの分流が流れていた低地——それが原形となる大江川の川筋だった——に大工事を施し、安定した水の確保と治水を図ったのであろう。私見だがこのとき整備された大江川は丹羽の辺り以南だったのではないかと思う。浅井町大野の木曽川に杵を造り、ここから大江川に導水する改修工事を行ったのは伊奈備前守で、それは慶長13年(1608)になってからのことである。

次に、同じ一宮市史の古川の項に「木曽川の二之枝、即ち丹羽郡古知野町大字般若付近に於て分水せしものは西南に向かって進行し、葉栗郡草井村大字^{むらくのせがしら}村久野瀬頭に於て更に二分した。南線は現在の般若用水であるが、西成村春明の北に於て水勢に任せて西行し、瀬部・時之島の間を経て丹羽に突当り大江川となり、また北線は前飛保(今宮田町)松竹・瀬部の北を過ぎて浅井の池を成し、更に西流し佐千原・^{おしま}小島の間へ突進し(この川流は後年大江川築堤の為に浅井佐千原間に於て切断された)是に於て小島(今市内地名)なる一小島嶼を作り、勢い南西進したものが古川である。下って萩原川・日光川と名くるもの

であるが、これこそ往古尾張部に於ける木曾川の本流であった」という記述がある。

瀬部の北の水田地帯を江南団地方向から小さな川が流れてきているが、地図ではこれに日光川と記載されている。昔は浅井の温故井池おんこいに流れ込んでいたが、今は池の南を通り大江川に注いでいる。昔はこの一帯にいくつも清水が湧いていたものであり、名残を留める清水という地名が本郷町内の西部にある。

上に書かれているように、この日光川は大江用水によって遮断される前は、温故井池から佐千原交差点　ここに古川という地名がある　に向かって直進した。ところがそこに土砂が堆積し小島ができたので、水は島の北から西へと迂回して修文大学の方角に流れ萩原の手前で野府川のぶがわ　おそらくこれが三之枝の名残である　と合流し、その後は佐織・蟹江と南進して飛島村では1 km近い川幅となって伊勢湾に入る。

なお瀬部の北を流れている日光川は、現在は大江川に入り丹羽の南の押出という地名のところで再び日光川を派生し、上で述べた佐千原の古川に向かって流れる。

更にもう一つの流れ、瀬部の南・時之島の北の水田地帯を流れる時之島排水路がある。この川の水は昔は大変にきれいで、時之島城址の北あたりではイタセンパラが見られたものである。

この時之島排水路を東へ遡ると、四日市場の南の水元という地名のところで新般若用水できたのは寛政三年（1791）——に当たる。更に進むと、時之島の東境・春明の北境のところで般若川（般若用水）に繋がる。ここの地名が牛洗うしあらい（時之島）で、東隣には南砂吹埋すなぶきうめ・西砂吹埋・東砂吹埋（いずれも春明）といった興味ある地名が存在する。

この般若川を遡ると、江南の平和堂駐車場の中央部・滝学園の南・古知野高校の東・ヤ

マダ電機江南店の西・江南厚生病院の西へと進んで行く。厚生病院の西方にあるピアゴ江南店が立っている辺りが村久野町瀬頭^{せがしら}である。

私はかつて瀬部の北を流れる日光川を村久野の方へ辿っていったときに、瀬頭^{せがしら}という地名を発見して興奮したことがある。ここで使われている瀬は決して当て字でなく木曽川の瀬に間違いないと確信したからだ。瀬頭に突き当たった太古の木曽川（二之枝 = 古川 = 般若川）は二つに分かれ、その一つが時之島へと流れる般若川になったわけである。

また、古い文献には左瀬部や瀬部南郷といった呼称が見られる。当時から瀬部の南と北を大きな川が流れていたことを彷彿させる表現である。

下は「浅井町史」にある図を参考にした。千田英元氏の「木曽川の水と尾張地域」（1984）にもほぼ同じ図がある。

